

あとがき

私事で恐縮だが、今月末日をもって定年退職する。あわせて本誌編集委員も辞することとなった。前任の富田仁先生の後任として一般検査関係を担当することになって約20年、読者としては創刊以来の定期購読者だから本誌とは総計35年のお付き合いということになる。

臨床検査を取り巻く社会情勢は20年前とは大きく様変わりをしているが、創刊当初より本誌を貫いてきた基本理念は変わっていないと思う。それは臨床から現場まで、あるいは基本技術から最先端の情報までと、毎回幅広い内容を盛り込んできたことである。新人にとってもベテランにとっても役立つ内容をと絶えず心がけてきた。その成果は今月号を見ても明らかである。

能勢義介さんの“臨床検査技師の未来”と北村光明さんの“健康食品管理士”には思わず「そうだ!」と唸らせるベテランならでの説得力と情熱が溢れている。増田詩織さんの“遠心分離条件と検査データの変動”と堀田真希さんの“尿試験紙は尿の温度によってどの程度影響を受けるか?”は、普段見過ごしがちなちょっとしたことでも実際に手を動かしてみると見えてくるものがあることを如実に示している。若手がこういうものを読んで発奮してくれると嬉しい。

“一般検査室から 私の一枚”は今年1月から始まったばかりの新シリーズであるが、先月号・今月号と見てきて良い企画だと自画自賛している。2月号の伊瀬恵子さん、今月号の吉澤梨津好さん、いずれも美麗な写真もさることながら短文であるにもかかわらずまるで1個の論文を読むような完成度の高さを感じる。4月号以降が楽しみである。

そして思うのだ、『検査と技術』を読んで一番勉強をさせてもらっていたのはきっと編集子自身だったのではないのかと……。4月からは技師教育に携わることになっているので、まだまだ現役の検査技師として本誌は手放せそうにない。これからも座右の書として大切に愛読していくつもりだ。

最後になりましたが、みなさん長い間ありがとうございました。

(今井宣子)